

アメリカ創価大学での講演会より

トインビー・池田対談の意義

ウィンストン・E・ラングリー

前川健一 訳

羽吹学長、過分のご紹介をいただき、ありがとうございます。あたたいおもてなしにあずかり、感謝申し上げます。学生の皆様、教職員の皆様、またご列席の皆様、お招きいただき、本当にありがとうございます。しました。

今しばらく、皆様と一緒、以下のような五つの論点について考えていきたいと思えます。①まず、私たちが生きている時代について簡単に述べます。②次に、(トインビー・池田の)対話集について、それが一般的に、かつ明示的に、どのような寄与をもたらすかと

いう観点から論じます。③次いで、いくつかの対話について、そこに示唆された主張に注目して検討します。④そして、そうした主張が、皆さんや私を含むこの世界にとって、どのような意味を持つかを考えたい。⑤最後に、皆さんのこれからの挑戦がいかなるものであるのかに触れたいと思えます。

一 私たちの時代

これから述べますように、この世界は様々な不安と苦悩に満ちています。そうした不安と苦悩は、たとえ

ば、戦争という名の突発的事態によってもたらされます。そこでは、銃・ミサイル・戦車その他の武器によって、人間集団が相互にぶつかり合います。その目的は、互いを殺傷し、安らかな生活を破壊し、未来の安全をも破壊することなのです。また、不安と苦悩は、老人・児童・労働者・低能力者が社会から見捨てられ、い、こ、によっても引き起こされます。自然環境を尊重しなければ、多くの人が必要なものにも事欠くこととなりますが、こうしたことも不安と苦悩を招きます。農村が都市化することによっても、不安と苦悩はもたらされます（この都市化は、数世紀前から始まったものです）。現在の急速な進展は昔ながらの安穩な生活を脅かすものとなっています。また、国境を越える集団移動は増加しています。彼らは旧来からの社会の安寧に課題をつきつけます。これもまた不安と苦悩をもたらすものです。宗教は、至高の理想を保持するものと信じられていましたが、大量虐殺と結びつくようになってしまいました。これもまた不安と苦悩をもたらすものです。政治・社会・宗教・道德などの分野に於ける指導者の

多くは、貪欲・偏狭な忠誠心・窮屈な自己限定・物質主義的な信念といったものに支配されて、人間性に対する大逆罪を犯しています。彼らは理想というものを嫌い、それを「現実」と置き換えようとしています。この「現実」と呼ばれるようになったものは、短期間の「損得勘定」であり、それが人間の可能性を掛け値なしに表現するものとされているのです。こうしたことも、不安と苦悩をもたらすものです。

そして、人間——潜在的には気高いはずの人間——を広汎に見出すことも出来ません。その代わりに私たちが見出すのは、道德的にも社会構造の上でも変容してしまつた社会の増加です。こうした社会では、理想的な統合を目指すことはありませんし、それが可能だとも思っていない。そして、政治は、「大騒ぎ」——これは理想の欠如から普遍的に生じるものですが——をなだめるという役割を当然のこととしています。それ故、精神による偉大な努力は麻痺させられたままです。まさにこの時にあつて、私が取り上げたいのが、卓越した英国の歴史家トインビーと、著名な池田大

作・創価学会インターナショナル会長との対談『二十世紀への対話』(Choose Life)です。

二 対話集 (dialogues) の意義

この二人の知識人による、比類なき意見交換が有する意義は、たとえば以下のような問いに回答を与えている点にあります。「理想を持たずに、我々人間はどこに存在するのか。理想なしで人間がなしとげたものは何なのか。理想から生れたのではないような、何か持つに値するもの——しかも、それを擁護する人が、非現実的だとか（もつと侮蔑的に言えば）空想的だとか非難されないようなもの——を、人間は持つっているのだろうか」。対話集が言うところは、こうです。「理想がなければ、人間のいる場所はない。我々が現に持っているもので、持つに値するものは、理想から生れたもの以外にありえない」。対話集が今日我々にとって一般的に有する意義は他にもあります。

意義深いのは、明らかに異なつた文化的背景と思考様式に立つ二人の思想家が意見交換をすることができ

たということです。トインビーはユダヤ・キリスト教の遺産を受け継ぎ、池田は仏教の伝統に属しています。また、意見交換の内容は、個人・社会・文化・哲学の次元にわたり、政治・美学・宗教・経済・倫理などを主題としています。このこと以上に注目すべきは、いくつかの問題について、彼らが明確に意見の一致を見ている事実です。そうした問題は、きわめて見解の分かれるもので、論争を引き起こすものです。すなわち、いたるところで人間に（昔も今も）影響を与えてきた、生きた問題なのです。まさに先ほど「私たちの時代」という標題のもとに取り上げたあらゆる問題に彼らはふれています。

彼ら是对話集の中でこれらの問題や思想に触れていますが、我々が見出すのは、それが大いなる大学 (university) —— 学生たちを「思想の宇宙 (universe)」の理解へと導こうとする、学びの場——を形成するものだという事です。しかし、大学（という譬喩）は、単に対話集の中で注目を浴びているものという以上のものです。大学というものは、文明を形成する知的資本

の総体に注目し関心を持たねばなりません。そして、この関心は、そうした資本を存続させる（つまりは単に保持する）ことでは、十分な達成にはいたりません。それに加えて、偉大な大学というものは、次のようなことに絶えず関わりねばなりません。すなわち、既に失われたり奪われたりしたものを発見し補修すること。四散したものを収集し再び結び合わせる。破壊されたものを再建すること。汚染されたものを浄化すること。劣化したものを修復すること。知的資本のうちの或るものを修正し、改革し、より分りやすくし、しばしば新しく命名すること。⁽²⁾ トインビーと池田は「二十一世紀への対話」の中で、我々の知的資本のうちの或るものを修復し、語りなおし、再検討しています。

実際、彼らはまた、人間性についての、よく知られた、ありきたりな見かたを修正しています。人間性が精神性によって構築されていること、また、そうした精神性を表現し形作るにあたっては宗教が中心的位置を占めることを、彼らは再確認しています。そして、歴史分析においては一般的になっている窮屈な単位を

受け入れるどころか、彼らは検討の基盤として最大の文化的単位（いわゆる文明）を選んでいきます。この（文明という）単位の問題については、後の議論で立ち戻りたいと思います。

この書物の一般的価値ということであれば、話が尽きることはないでしょう。しかし、私の目標は、政治理論家ないし政治哲学者としての観点から、彼らの企図を見つめることにあります。というのは、彼らの達成した注目すべき成果のうち、この側面については、訓練を積んでいなければ、すぐには分らないからです。

三 『二十一世紀への対話』

そこに示唆された幾つかの主張

政治理論ないし政治哲学の上で、この対話集が前提とする幾つかの立場は、驚くべきものです。私は、この前提を六つの立場にまとめ、これを今回の我々の意見交換のために利用したいと思います。これらの前提のうち第一のものは、「理想的な秩序は、かなりの確実さで、定義可能である」というものです。多くの分野

で、この（東西の）二人の思想家は、今述べたきわめて重要な政治哲学上の論点に触れています。それは、存在論的合理主義と呼ばれるものです。すなわち、存在の本性ならびに世界そのものは知覚可能であり、人間による推論が可能である、という主張です。第二の前提は、「人間には、そうした秩序を打ち立て、維持する能力がある」というものです。この前提を、心理的合理主義と呼びたいと思います。第三の前提は、この対話集の中心をなす特徴です。それは、「組合労働者・法律家・医者・母親・教師・農民といった立場の如何を問わず、個々の人間は、この秩序の樹立と維持に対して重要な貢献をすることが可能である」というものです。この前提は民主主義の理念と結びついています。私はこれを、個人ならびに民衆による統治と呼びたいと思います。この他に三つの前提が、この対話集と結びついています。

第四は、「この理想的秩序を創造し樹立し維持する、人間ないし個人の能力は、たとえば国民国家といったよく知られた歴史上の集団や組織の中に具体化されて

いる」というものです。この前提を歴史的完成主義と呼びたいと思います。第五の前提は、人間というものが精神によって成り立っていることを主張します。すなわち、「この精神は、眼前の歴史的・社会的状況を理解するだけでなく、それ以上のものを理解する」というものです。これを実存的超越主義と呼びたいと思います。第六の前提は、説明しやすいものです。それは、「個人のアイデンティティは複合的であり、拡張可能である」というものです。それでは、それぞれの論点を見ていきましょう。⁽³⁾

〈存在論的合理主義と心理的合理主義〉

「理想的秩序は定義可能である」という前提には、次のようなことも含まれています。「世界は理解可能である」「世界は、それ自身の中に、そうした秩序の原理を含んでいる」「こうした原理は、首尾一貫したものである」。この前提と並行しているのが、心理的合理主義です。これは次のようなものです。「人間は、この世界の中で『くつろぎ』を感じる」「このくつろぎの感覚は、

力を持っているという感覚に由来する。それは、自らの生活を導き発展させるために、物事の秩序を形成する諸原理を理解し利用する能力を行使しているという感覚である。この二つの前提は、トインビー・池田の対話集と、どのように関係しているのでしょうか？

第一部「人生と社会」の中の「人間を取り巻く環境」「知的生物としての人間」「健康と福祉のために」「社会的動物としての人間」の各章で、彼らの議論の主題となっている分野を見てみるなら、この二つの前提が全てのものを支えていることが見出されるでしょう。たとえば、「理性と直観」——人間が知識を得、ものごとの意義へと近づく二つの相補的な手段——についての意見交換において、トインビーは、以下に見るように、科学と呼ばれるものの公的性格に焦点を当てるとともに、そうした知識を獲得し検証し共有するための手段についても論じています。

知覚と理性はともに意識レベルで作用しますから、これによって、さまざまな人間が何を知覚しどう推

す⁽⁵⁾。

この引用が述べているのは、次のことです。「この世界と、そこに包含される全てのものは、理性ならびにそこから生み出された科学にとって理解可能な原理によつて支配されている。そうした理解の結果得られた知識は、公に共有されるものであり、そうでなければならぬ。直観の能力——人間の認知能力の一部であり理性に伴うものでもある——もまた、我々が何かを知るにあたって重要な一部をなす。宗教における最も精神的に高揚した経験でさえ、理性を用いた探求の対象となつて然るべきである。もし、理性と直観を用いて人間がこの世界ならびに物理的宇宙を理解できるようにしても、この世界でくつろぎを覚えることは可能である。というのは、我々は次のようなシステムないし秩序を認識し創造し発展させることができるからである。すなわち、この世界そのものを規定する原理と構造とに合致したシステムを、である。これらは深遠な主張であり、みなさま一人一人が熟考していただきたいと思ひます⁽⁶⁾。

論しているかについて、互いに意見を交換することができます。彼らはこうして共通する現象の説明、共通する思考の結論に達することができます。われわれは、そうした共通の説明や結論を、客観的と呼びます。その意味は、それらがある一人の個人だけに特有の、したがって他の説明や結論と異なるような、その個人にも他の人間にも共通性のない、私的な見解や思想であつてはならないということです⁽⁴⁾。

池田氏は、この路線に沿つて意見交換を始めていますが、単にトインビーの上記の意見に賛同しているだけではありません。彼は、西洋の宗教指導者たちの考えを乗り越え、トインビーが述べたような探求の方法は宗教にも適用されるべきだと言ふのです。彼（池田氏）の考えでは、宗教を直観的な探求の様式と見なす過去の慣習は不完全なものです。その理由は以下のようなものです。「宗教が直観だけを強調するとドグマに陥つてしまひます。私は、宗教の直観智も、理性の光に照らされて初めて現実に生きたものになると考えていま

〈その他の諸前提〉

第三の前提はこの初めの二つの前提と同様に重要であり哲学的にも根本的であります。社会的・道徳的・政治的意義において、この二つをしのいでいます。それは次のような主張です。「人間は、個人としても、社会集団の一員としても、理想的な秩序の創造と維持のために意義ある貢献をなすことができる。言い換えれば、教師・農民・組合員・郵便局員・専業主婦・事務員など、どのような職業であつても、貢献をなすのである」。これは、「偉人」を中心とする歴史理論——トインビーがかつて採用した——とは幾分か抵触します。というのは、これは次のように主張するからです。「理想的な秩序の実現と維持に貢献する本質的な要素が個々人の中にある。すなわち、好奇心、洞察力、情熱、道徳的衝動、共感能力、審美的感性、実践的技術、苦痛の経験と理解、そして（踏みにじられがちな）良心といったものである」。このことは、ある程度は、世界人権宣言における莊嚴な差別撤廃条項の基礎ともな

っているものです。宣言が言うように、「人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、門地その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく」、全ての人は、権利と自由を与えられています。それは、我々の民主社会における権利付与の源泉となっています。

第四の前提は、対話集のいたるところに見いだされるものです（たとえば「都市から農村へ」「新しい労働運動のあり方」「国家解消論」「指導者の条件」などの各章）。そこでは、次のように論じられています。「理想的秩序に貢献する、個々人ないし人類の能力は、具体的な歴史的集団や組織の中に見出される。すなわち、国民国家、都市国家、哲人王、官僚政治、プロレタリアート、農民階級、連邦共和国、立憲君主制、自由市場、キリスト教民主主義、アシラム、コミュニティ、法の支配といったものが、それである」。確かに、我々が歴史の中に見出すのは、こうした組織の一つまたは幾つかにもとづいて、理想的な社会秩序のシステムを打ち立てよ

うとする努力です。今日でも、一つの組織（つまり帝国）が、この世界全体にとって実現可能な未来の選択肢として復活したように見えます（七十五年ほど前には道徳的に信用を失い、さもなくば、あらゆる面で信用を失ったと考えられていたが）。次に、最後の二つの前提——実存的超越と、複合的で拡大するアイデンティティ——を見てみましょう。

この二つの前提のうち初めのものは、「挑戦と応戦」によって特徴づけられるトインビーの歴史理論の中に適切な形で具現されています。この歴史理論は、環境に打ち勝つ人間の能力を示唆しています。言い換えれば、人間の能力の限界、墮落、衰退を示す様々な状態は、どれほど一見したところ救いようがなくとも、回復不可能なものではないということです。それらは克服可能であり、人間にはそれらを克服する能力があるのです。しかし、池田にとっては、この能力は、トインビーが示唆する以上に強い力を持つものです。というのは、この卓越した歴史家は、良い結果をもたらす応戦が存在しない挑戦もある（だからこそ、滅んでしまっ

た文明がある）と論じているからです。一方、池田の立場は、いかなる挑戦にも応戦は可能である、というものです。すなわち、「人間革命」という言葉で示されるように、人間に内在する仏の生命こそが、個人ないし集団の最も決定的な変革を成し遂げる主体となりうるものなのです。この潜在的な主体にとって、乗り越えられないような障害は存在しないのです。

我々のアイデンティティについては、「それは拡張するものであり複合的なものである」と主張されます。我々は個人としてのアイデンティティを有しており、それによって自らが首尾一貫した存在であるという感覚を得ます。すなわち、名前、外見、服の好み、血液型、さらには指紋などであり、遺伝的素質については言うまでもありません。我々はまた（大抵一つ以上の）社会的アイデンティティを有しています。それは、我々が交際する社会的集団に基づくものです。国民としてのアイデンティティは、我々がしばしば自慢の種とするものです。それは、言語、民族、国籍、共有された苦難（ないしは勝利）、宗教などといった、現実の、

ないしは想像上の、指標にもとづくものです。アイデンティティを共有する他の人を知らないということもありえますが、我々は、そうである人とそうでない人、

そうでありうる人についてイメージを作ります。そして、我々はしばしばそうしたアイデンティティのために命をも捧げるのです（イラク、チェチェン、パレスティナ、米国などをご覧ください）。しかし、他のアイデンティティもあります。その中には、宇宙的アイデンティティも含まれます。

星々の招き、花々の微笑、露のきらめき、木々の静けさ、音の響き、滝の激流、電子の運動、詩歌の欲び、果物の甘さ、といったものに、我々は反応します。全てのものが我々を魅惑し、我々が一なるものに属していると感じたり考えたりするように誘うのです。

四 諸前提が我々にとって持つ意義

対話集に内在する諸前提から取り出された幾つかのテーマを考察してみると、あまり安らぎを覚えることはできません。特に、或る種の重要な（かつ、しばしば

広汎に見られる) 人間経験に照らしてみるときに、そうです。これらの諸前提の中から幾つかの要素を取り出して、簡単に検討してみよう。すなわち、個人の役割と能力、理想的な秩序、そうした秩序を表向きは実現してきた(ないしは体現しようとしてきた) 歴史的集団や組織、そして、人間のアイデンティティの問題、といったことです。

「理想的な社会秩序(たとえば、正義にもとづく秩序)は樹立可能である」という前提と主張は、ひいき目に見ても、疑問の余地のあるものと言えるかも知れません。確かに、「財産の私有(または、公有)は、こうした秩序の構成要素でありうるし、そうでなければならぬ」という考えは、つまらないものであることが判明しました。そうした秩序を体現した個別の歴史的組織の役割と能力も、同じようなものでした。結局のところ、個人の場合は(もし、その人が存在論的合理主義の前提を信奉していたとしても)、彼ないし彼女は信頼できず、信用できず、非理性的ですらあることが判明しました。この点は、現代心理学の主要学派の論点です。問題点

ました。ジャン・フランソワ・リオタールやミシェル・フーコーといった卓越した思想家たちは、人民の解放というものの一般に信を失い、モダニズムに魅力を与えてきた正当化の言説を拒否しました。そして、全てのポストモダニストがそうであるように、個人とその限界に焦点をあてました。

展望はほとんどありません。我々は行き止まりに達してしまいました。そして、カンボジア・ルワンダ・バルカン半島・チェチェン・ハイチ・パレスティナなどで起ったことを目の当たりにして、多くの人々は、かつての植民地住民には自治能力があると信じてよいのか問い始めています。二〇〇一年までには、かつて植民政策を展開した国々とその同盟国とは新たな支配権を迫ってきています。⁷⁾

アイデンティティの問題について言うと、その拡大ということが表に出てきたり、それを涵養することに焦点があてられたりといったことは程遠い状況であり、ナショナリズムは今日隆盛をきわめています。我々は多文化を擁護する運動にも直面しています。そ

があるにもかかわらず、それは広く支持されています。日常生活における個人の実際の行動を見ると、人間は非理性的だという考えはかなりの重みを持っています。

理想的秩序を標榜した歴史的な存在は、そうした秩序を表現することにおいて、個人以上に成功したわけではないことが判明しました。国民国家は、戦争・腐敗そして貪欲や利己性との結びつきを見てみるなら、理想的秩序を体現したものではありえませんが。哲人王、労働組合、解放運動、農民階級、議会民主主義、自由市場、キリスト教民主主義、立憲君主制といったものも、全て信用できないものであることが判明しました。

たとえば、解放運動について考えてみますと、そこには、次のようなことをもたらす手段があると考えられていました。すなわち、帝国主義の支配下で抑圧された人々による自由の獲得であり、この解放をもたらしした経験によって、他の人々を鼓舞する実例となることです。一九六〇年代におけるこうした運動に対する全世界的な楽観論は、一九八〇年代には絶望に変わ

り、その美点にもかかわらず、人々の間の実際の(ないし、あると思われる) 差異を強調し、それにつれて、限定的なアイデンティティに焦点を当てています。では、トインビーと池田の対話集に内在する主張は間違っているのでしょうか? 答えは「否」です。この答えが正しいことを証明するために、これらの前提が我々にとって持っている意味に目を向けてみましょう。

まず、最初の二つの前提とその主張に関してはちよつとした論争がありますが、存在論的合理主義と心理的合理主義を支持する証拠はきわめて力強いものです。それに反対する実存主義者の論争があっても、そのことに変わりはありません。そこで、残りの四つの前提とそれに関連した主張に取りかからねばなりません。

トインビーと池田の対話集は、第三の前提(歴史上の集団や組織による理想的秩序の体現)と第四の前提(個人の重要性)とを一つのものにしてしています。というのは、彼らは正当にも以下のようなことを信じています。すなわち、国家、議会、法、社会運動、その他いかなる社会・経済的集団であれ、制度はそれを構成する人間を

離れては存在しない、ということですが。それ故、そうした共同体が成功するか失敗するのか、その可能性と限界とは、人間自身の限界と見込みとに他ならないのです。

人間というものは、対話集が焦点をあてているように、みながみな墮落した人間なのではありません。そうした人は、潜在的に有している高貴な地位から頹落して、自己中心的で、貪欲で、道徳的には眠っているか死んでいるのも同然で、精神的には空虚です。一方、対話集が語っているのは、上記の全てのあやまちを示しつつも、同時に、無限の潜在力を有し、理想的な社会秩序を創造し維持することもできるような人間です。彼らは次のように述べています。理想的な社会秩序を現実のものにする前提条件は、人間が自らを宇宙を構成する多くのものの一員（メンバー）と見なし、それに応じて自らを教育することである、と。

それは、より巨大で包括的な全体の一部であり部分であり区分であるということです。また、記憶とメモデイとを持つことでもあります。それを呼び起こし、

することもできませんでした。これは、多くの点で、我々と共通する状況です。我々は宇宙の王に、とりわけこの地球という惑星の王になろうとしています。しかし、我々はしばしば、単に地表の上にいるだけです。我々は、その一部であるかのように、ないし、そこに所属しているかのように、振舞ってはいません。トインビーと池田は、我々にメンバーであることを要請します。そうやって初めて、理想的秩序の樹立にきちんと着手することもできるのです。

歴史というものに対する我々の感覚では、我々は自らを地域文化の一部であると同時に、文明と呼ばれる、より広く、より深い文化の一部であると見なさねばなりません。エマーソンが我々に思い起させようとしたように、現代という一瞬と、人類が経てきた何世紀もとの時間との間に関係があることを理解しなければなりません。進化論ならびに生物学の言葉で言えば、「我々はみな、生きていて発展している宇宙の中に埋め込まれており、それ故、我々は」そのなかの「全てのもの」としての「い」と「こ」なのである⁽⁸⁾。宇宙と、その中におけ

思い出し、呼び返し、見直すことができるのです。メンバーシップ（会員資格、一員であること）とは、自らがメンバーであることによって享受する地位ですが、それは自らが属する集団の他のメンバーとの関係を理解し関係を結ぶ能力を含意しています。

ブライアン・スウィム（Brian Swinme）が、彼の著書『宇宙の隠された心』（The Hidden Heart of the Cosmos）の中で、ソフォクレスの悲劇『オイディプス王』に言及する時、彼はこのメンバーシップの概念を理解しています。ご存知のように、この悲劇においては、オイディプスは、ある日、王国にやって来て、不運な出来事の結果、王を殺し、女王を妻とします。しかし、彼は、王は彼の父であり、女王は彼の母であつたという衝撃的な事実を知らなかったのです。

オイディプスは、今やテバイの王となりました。しかし、彼はその中にいるのでなく、そこに所属しているのでもありません。彼はメンバーではなかったのです。彼は、適切な関係を知ること、自らをそれにしたがわせることもありませんでした。また、そうす

る各人の立場とが、このように見なされる限りにおいて、我々は次のように言うことができます（これは、トインビーのいうよりは、池田の意見に近いものです）。すなわち、「互いに支え合う縁起（相互依存）の中で、人間を含む全てのものは共存している。これは、宇宙的アイデンティティを含意している」と。そして、宗教とその教義は、単に人間と神との関係にかかわるだけではなく、人間以外の全てのものを包含するように拡張していくのです。

理想的な社会秩序を体现している、あるいはそれを約束している、と見なされてきた歴史上の組織や集団と同様、既に失敗を犯した個々の人間も、なおそうした秩序を樹立するための潜在的な源泉であるのです（私はここで、トインビーが、池田氏ほどには樂觀的でないことを示しておかねばなりません。それは、労働組合についての、ならびに、それが理想秩序に寄与する見通しについての彼の見解にうかがわれます。彼は人間の本性をかなり固定されたものと見なしており、労働組合において出現してきた貪欲（と彼が見なすもの）を阻止するために独裁政権を支持してい

るようです。しかし、彼やサミュエル・ベケットのような文学者にとっては、歴史の中での根無し草状態、道德的確実性の広汎な欠如、執拗な生の無意味感などは、我々が崩壊のきしみをあげていることを示唆するものであるのに対して、池田氏は、我々自身の最も低劣なあり方を眼前にしてもなお、我々の可能性を探求します。彼は、かつて今も、我々は我々自身を修復する源泉であると考えています。そして、彼はおおむねトインビーをこうした考えの方へと導いています。

池田氏にとっては、その源泉は、人間の内的変革（人間革命）の能力にあります。この変革は、個人において（そして、あらゆる新しい思想において、たとえば「千里の道も一歩から」と言うように）まず一人の心の中で始まり、それが人々へと広がり、更に別の人々へと広がっていくのです。この個人に焦点をあてた見方はとりわけ重要で、それは、「歴史上の集団や運動は個人から形成されている」という我々の以前の論点から見ることです。もし、個人が変革しうるものなら、彼らが形成する歴史上の組織や世界もまたそうです。我々が語っ

れます。また、人間や環境に害を及ぼすと知られたものをアメリカで売ることを禁止しながら、それを他のところで売るとは合法としています。まるで、人権は人間性にかかわるものではなく、地理にかかわるものであるかのようです。

これまで示してきたように、トインビー・池田の対話集が、人々に所属することを呼びかけ、その一員であることを求めるのは、エコロジカルな性質のもので、す（所属のエコロジー）。それは、人々が——さらに、歴史上の集団や組織もが——、これまで述べてきたような多様な関係性や理想を体現することを目指します。彼らが対話集の中で擁護している理想には以下の二つのものがあります。一つは、あらゆる形態の生命——宇宙の一切のものを含む——に対する畏敬です（これは池田氏にとって最高の理想です）。もう一つは、世界を祖国とする愛国主義の実践です。我々が所属のエコロジーを採用するなら、この（全ての生命への）畏敬は困難なものではありません。所属のエコロジーは次のようなことを主張します。『自らを形作っているもの、そ

ている変革というものは、単に思想のレベルにとどまるものではありません。

もし思想や理想が世界を変えることができるのなら、それはさらに、それを担う人（々）の生活をも変えるはずで、要するに、そうした人は、自らの行動において思想を担うもの、思想の模範とならねばならないのです。その人は、その思想を体現しなければならぬのです。真実（truth）に到達しそれを経験しようとするなら、誠実な（truthful）生活がなければなりません。善に到達しようとするなら、善い行いをしなければなりません。平和に到達しようとするなら、平和な行動を体現しようとしなければなりません。

イメージと分裂によって成り立っている我々の世俗的な文化では、人々が民主主義者に変化することがなくとも民主主義は可能であると考えています。それ故、民主主義は選挙と呼ばれる儀式に縮減されています。また、他人のミルクに毒を入れれば、不法だと言われます。しかし、ミルクを生み出す自然の源泉である川や湖・空を毒で汚しても、法にしたがっていると云わ

る可能性のあるものは、他の人々の中に分有されている。我々全ては、生きていて発展する宇宙の中に埋め込まれている。我々は全てのもののいとこである。教育の目的は職業に必要な技術を獲得することではない。そのことも重要であるが、教育は人間としての人格の発展にかかわるものである。そのようにして発達した人格は、自らのアイデンティティに親密さを感じ、それを享受するであろう。と同時に、次のようなことを発見するだろう。個人・社会・国家それぞれの次元に属するものと宇宙的なものとの結びつきこそが、精神を鼓舞し、個人と事物とに真の意味と価値を与えるのである。

トインビー・池田の対話集は、（ポストモダンリズムが主張するような）『理想的な秩序を樹立することは不可能だ』という主張を受け入れません。それどころか、『それは可能だ』と言います。しかし、もしそうした秩序が可能だとしても、そのためには、我々には以下のことが必要です。すなわち、宇宙的アイデンティティを探求すること、存在と生成のエコロジーによって思

考すること、民主主義・国民国家・哲人王・キリスト教国家といった具現化されずに終わつた思想ではなく、我々自身（および他の人々）を見つめること等です。この宇宙的アイデンティティが持つ自由と規律によって初めて、真に人類社会の一員（メンバー）であることが現実のものとなるでしょう。人類社会の一員であることによって、我々の記憶は呼び覚まされます。それは、我々の過去、本来の自己、そして「埋もれた——文化の中に局限されることで隠された——命」についての記憶を呼び覚ますのです。そしてまた、人類社会の一員であることによって、我々の個人としての未来のビジョン、ならびに集団としてのビジョンが構築されるのです。ここで私は、「埋もれた命」について語るマシュー・アーノルドの詩をパラフレイズしてみたいと思います。

彼は私たちに次のように語りかけます。「退屈な思い出」、凍りついた衝動、取り消された夢、そうした日々の中、時として、ひどく混雑した街路で、喧騒と汚穢のただ中で、渴望がわき起こる。真実にして原初の自

己の熱と不断の力をささげようという渴望、心に残る記憶によって憧れにふけりたいという渴望、色々なものの匂い・風の香り・子どもの笑顔を抱きしめたいという渴望。そして、たまさかに、（アーノルドの言葉を引けば）「私たちの目は、もう一人の目の中に、明らかに読み取る」、私たちは何かが啓示されるのを見ます。

稲妻が、胸のどこかに、再び落ちる

失われた心の鼓動がまた始まる

目は内へと沈み、心は平らかに

言わんとすることを言い、知らんとすることを知る

ジェンダー・人種・宗教・社会階層・資産・性的指向・民族といった壁に生を局限されること、苦痛・恐怖・政治信条・経済的原理主義などに局限されること、そして、権力を渴望することによって、我々は本来の自己を経験することを妨げられます。また、我々の多くのアイデンティティを一貫するものの探求を、他者の目の中に見ることが妨げられます。言わんとするこ

とを言い、心を曝す必要性が妨げられます。それによつて、池田氏が言う、世界全体をわが祖国とする愛国心——宇宙的アイデンティティが必要なのはこのためですし、これによって世界市民になるという我々の真の政治的使命が実現されるのですが——に対して目を閉ざすことになります。

五 みなさんの挑戦

議論を始めるにあたって、私は不安と苦悩について語りました。私がその時焦点をあてたのは、眼前の現実をとらえることであり、トインビー・池田の対話集がそれを論じていることを示すことでした。しかし、もう一つの理由があります。結びとして、このことを述べたいと思います。それは、テロリズムに対処する我々の努力についてであり、子供たちに次のことを教えることです。すなわち、この世界に関する最も重要なことは、人々の間に存在していると主張されている差異であり、この差異と世界とが示している危険性である、ということです。⁽¹⁾この問題は、我々のこれまで

の議論の全てを疑問に付します。すなわち、存在論的ならびに心理的合理主義、歴史的完成主義、民衆による統治、実存的超越、宇宙的アイデンティティを発現させる見通し、などの全てをです。次のように言う人もいるかも知れません。「それ（差異の強調）は現状を悪化させる。全ての人類の相似性をくつがえそうとするものだ。その上に人類の未来が築かれるべき道徳的・知的連帯を蝕むものである。一九一四年から一九四五年にわたる三十年戦争という道徳的頹廢の後に結ばれた、後に続く世代を戦争の惨禍から救うように行動するという聖なる誓約を裏切るよう共謀させるものだ。」「この世界に関して重要なことは、それが体現していると言われている危機にある」という命題を受け入れることは、人間が恐怖・憎悪・復讐の同伴者となることを請け合い、現実の世界は今後も危険なままであると確実視することである」と。みなさんが挑戦すべきことは、池田氏が言うように、諸問題の「もつれた」性格を認識することです。制度——共和国、三権分立、アシュラムなど——だけが我々の問題に答えを与える

という、昔ながらのありきたりな見方を拒むことです。自分自身の中から「埋もれた命」を発掘することです。それは、まだ目覚めていない鼓動であり、内なる仏界であり、他の人々の靈感に点火することができるとのものです。そして、人類が自らに課した最も高貴な目的の一つのために、みなさんの大学での教育を用いていくことです。それは、人類のために普遍性を獲得することであり、宇宙的アイデンティティを獲得することです。みなさんは、それを継承していく人々なのです。トインビー・池田の対話集が力をこめて教示しようとしていた、我々に共有される文明が求めているものは、まさにこれなのです。

原注

- (1) 私の見解では、この書物は、一つの対話 (dialogue) という以上のものを含んでいるので、対話集 (dialogues) という言葉を使います。
- (2) 故マイケル・オークショットが、論文 "The Study of 'Politics' in a University" (「大学に於ける政治学」教育について) の中で、これらの点のいくつかを論じ

York: Orbis Books, 2000), p. 99

- (9) たとえば、ヘケットの三部作『モロイ』『マロウンは死ぬ』『名づけえぬもの』や『コドーを待ちながら』『勝負の終わり』などを参照。
- (10) (訳注) Matthew Arnold, "The Buried Life"
- (11) 『ボストン・グローブ』(Boston Globe) 紙のジェイムズ・キャロル (James Carroll) 記者はコラムの中でこの点を取り上げ、深い洞察を示しています。

(ウインストン・E・ラングリー／
マサチューセッツ大学副学長・国際政治学者)
(訳・まえがわ けんいち／東洋哲学研究所研究員)

ています。Michael Oakeshott, *Rationalism in Politics and Other Essays* (Indianapolis: Liberty Press, 1991), pp. 194-199. (邦訳 嶋津格他訳『政治における合理主義』勁草書房、一九八八年)

- (3) 私の思想は多くの人から影響を受けていますが、今述べた諸前提のうち最初の二つについては、私の前の同僚であるグレン・ティンダー (Glenn Tinder) 博士に負うところがあります。"What Should Political Theory Be Now?", in John S. Nelson (ed), *What Should Political Theory Be Now?* (Albany: State University of New York Press, 1983), pp. 153-165
- (4) 『二十一世紀への対話』(『池田大作全集』三、聖教新聞社、一九九一年) 五九頁。(訳注 原論文では英語版より引用しているが、以下、日本語版にもとづいて引用し、英語版の頁数は省略する)
- (5) 『二十一世紀への対話』六〇頁。
- (6) 次のことを心にとめておいてください。二人の思想家は、いずれも理性だけが、物事の意味をとらえる上で適切な手段だとは見なしていません。直観は欠くことのできない補完物です。理性は直観にしたがい、直観もまた理性にしたがうのです。
- (7) Edward Said, *Culture and Imperialism* (New York: Alfred A. Knopf, 1993), pp. 26-27 (邦訳 大橋洋一訳『文化と帝国主義』みすず書房、一九九八年)
- (8) Brian Swimme, *The Hidden Heart of the Cosmos* (New